大好き

りのりあ

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=8801667

カミュベロ

本編4年後、成長しなかったベロニカのカミュベロ話です。
ネタバレ、捏造設定などなどありますので、ご注意ください。
ちなみにPS4寄りの設定です。

Table of Contents

大好き

　ふわふわと浮かぶ仲間たちの姿を見上げて、ベロニカは両手を掲げていた。その腕の間には愛用の杖が空中でぴたりと静止し、彼女の魔力を仲間たちへと送り続けている。
　たとえ、ここであたしが死んだとしても、希望は繋がる。
　世界を託すに足る仲間たちがいる。
　きっと邪悪な野望を打ち砕いて、ロトゼタシアに平和をもたらしてくれる。
　闇の力を受けて意識を失った仲間たちは、ベロニカの作った魔法の泡に包まれていた。ありったけの魔力を込めて、この墜落する命の大樹から彼らを逃すのだ。それが今のベロニカにできる精一杯のことだった。
　みんなが生きて、戦って、打ち勝ってくれる。あたしはみんなとは離れ離れになってしまうかもしれないけれど、それでも決して、この選択を後悔したりはしないだろう。
　ぐっと力を込めると、仲間たちが浮かび上がっていく。
　大樹が轟音を立てて傾いた。
　もう魔力は空っぽだ。
　ここから脱出する術はない。
　浮いていた杖が落ち、ベロニカはぺたんと尻もちをつく。
　きっと生き残ることはできない。
　すでに遠くなった六つの泡を見送りながら、それでもベロニカは口元に笑みを浮かべる。
　みんなのことが大好きだった。
　大樹は落ちて――

　――落ちて、地面に激突した。
　激しい足音が響く。ついで、扉が勢いよく開かれた。
「お姉さま⁉」

妹のセーニャだ。
「どうされましたか!?　敵襲ですか!?」
「大丈夫よ……落ちただけ……」
ベロニカは答えながら、まだベッドの上に残っていた右足を下ろした。
右手におたまを持ち、可愛らしいエプロンをしたセーニャが、にっこりと笑う。
「あら、そうでしたか。お姉さま、お怪我はありませんか？」
「ちょっと腰を打っただけよ。平気平気。体も軽いしね」
「幸いしましたね」
セーニャはおたまを机に置くと、床に転がったままのベロニカを助け起こした。
白いパジャマ姿のベロニカは、不満げな顔でベッドに座り直す。
「今何時かしら」
「七時を過ぎたところです」
「セーニャ、早いじゃない」
「そうでした。おはようございます、お姉さま」
ベロニカは眠気に忠実に開いた口で、大きくあくびをする。
「ふぁあ……おはよ。張り切ってるのね」
「はい！　なんといっても今日は、お姉さまと私の、二十歳の誕生日ですから！」
そうね、といまだ幼な子の姿をしたベロニカは、気乗りしない様子で頷いた。

「ハッピーバースデー！」
シルビアが紐を引くと、クラッカーが弾けた。
色とりどりの紙テープと紙吹雪が飛んで、宙を一瞬だけ彩る。
「誕生日おめでとう。ベロニカ、セーニャ」
昔よりもさらに磨きをかけた美貌で、マルティナが微笑む。
ベロニカは妹と顔を見合わせて、頬を緩めた。
「ありがとう。マルティナさん、シルビアさん」

「おふたりとも、ありがとうございます。お祝いの席まで用意していただいて、嬉しいです」
「あらあら、そんなに硬くならないで。アタシはあなたたちがふたり揃って誕生日を迎えられて、ほっとしてるのよ」
　言いながら、シルビアは手品のような手際で飛び散ったクラッカーの中身を回収する。
「シルビアさんたら。もうあの戦いから四年経ってるのよ？　世界は平和そのものじゃない」
「そうよね。どうしてそう思ったのかしら。とにかくおめでとう、ふたりとも。はいどうぞ」
　拾い集めた紙テープをセーニャに差し出す。不思議そうな顔をして手を伸ばすと、手に渡る瞬間にぽん！　と音を立てて紙テープが花束へと変化した。
「まぁ！　ありがとうございます！」
　セーニャがはしゃぐと、シルビアはにこりと笑みを返した。
「ほらほら！　料理が冷めちゃうわ！　主賓のセーニャちゃんが腕を振るってくれたんだから、食べないともったいないじゃない！」
「そうね。ところで、男たちはなぜ来ないのかしら」
「呼んでないもの」
　マルティナが訊ねると、ベロニカが当然のようにそう言った。
「今回は女性陣だけで、とお姉さまが言うものですから」
「あら。カミュちゃんも呼んでないの？」
　意外だと言わんばかりの問いかけに、ベロニカは顔をしかめる。
「なんでカミュだけ呼ぶかわからないわ」
　するとなぜか、三人が顔を見合わせる。これはセーニャの目をふたりが伺い、軽く首を振った妹にふたりが顎を引く。なんのアイコンタクトよ、と問い詰めたいような、聞きたくないような気分で、ベロニカは苦々しい表情を浮かべた。
「――さ、食べましょ？　すっごく美味しそうなんだもの！」
「そうね！」
　シルビアとマルティナが少々わざとらしく取り繕い、誕生日パーティーが始まった。
　ふたりはデルカダール城の厨房を巻き込んで作らせたという大き

なバースデーケーキを用意してくれた。机の真ん中には、四人でも食べきるのは難しいと思われる芸術的な四段ケーキが鎮座している。中のスポンジやふんだんに盛られた果実は、段ごとに彩りを変えている。
　その周りは、セーニャが早朝から腕を振るっていたご馳走の数々だ。一羽締めてローストしたチキンには、香草やライス、炒めた野菜がぎゅうぎゅうに詰まっている。ポテトにグラタン、炒め物に揚げ物にサラダにワインと麦酒などなど。ダイニングのテーブルに乗り切らず、セーニャの部屋の机まで持ち出して広げた始末である。
　勇者の仲間である女性四人は、しばらくわいわいと料理の感想を述べたり、プレゼントを渡したりと歓談の時を過ごした。
　それも落ち着いた頃、マルティナが思い出したように切り出した。
「それにしても、ベロニカの呪いはまだ解けないのね」
　三対の視線を受け、ベロニカは紅茶のカップを置いて軽く笑ってみせた。
「若返ったんだからラッキーよ。あとで若返りたいって思ってもできるものじゃないでしょ」
「それはそうかもしれないけど……不便ではないの？」
「たまにね。でももう慣れたわ。四年だもの」
　そうなの？　とマルティナはどこか釈然としない様子だったが、ベロニカは構わなかった。
「アタシも世界を巡ってるから、呪いに関する話はできるだけ調べてるの。でも、なかなかコレっていうのがないのよね」
　シルビアは困ったように腕を組み、マルティナも眉根を寄せる。
「デルカダールの王室に伝わる書物なんかも調べてみたわ。こっちも収穫はないけれど……」
「ふたりとも、ありがと。でも大丈夫よ。あたしは天才魔法使いなんだから、困ったら自分でなんとかしちゃうから。みんなの手を煩わせるほどのことじゃないわ」
「お姉さま……」
「セーニャも心配そうな顔しないの。あたしが困ってるように見える？　満喫してるわよ、この体。それより聞いてふたりとも、セー

ニャは最近攻撃魔法まで使えるようになったのよ」
　あら！　とシルビアが両手を合わせて歓声をあげた。
「すごいじゃない、セーニャちゃん！」
「立派な賢者ね」
　突然話の主役にされたセーニャは、目を白黒させながらも嬉しそうに首を振った。
「そんな、大したことができるようになったわけじゃないんです……！　お姉さまの魔法教室のお手伝いをしていたら、いつの間にか使えるようになっていて……私も驚いているんです」
「あたしだってびっくりしたわよ。さすがにまだ攻撃魔法じゃ負けないけど、日に日にうまくなるんだもの。あたしもうかうかしてられないわ」
「そんな、まだまだお姉さまのようにはできません」
　そう？　とベロニカはいたずらっぽく微笑んだ。
「もしも今邪神が復活しても、出てきたことを後悔させてあげられるわね。あたしとセーニャが揃ってるんだもの」

◆　◇　◆　◇　◆

　聖地ラムダとクレイモラン王国の間に位置する、古代図書館。古の叡智が詰まる巨大な塔は、いまや訪れる者もなく、雪原の中に静かに佇んでいる。
　ここなら誰に迷惑がかかることもないだろう。そう判断したベロニカが地下を大きく魔法でえぐり出したのは、もう四年前のことになる。突貫工事で地下に作られた天才魔法使いの秘密の研究室は、今では地上階から隠された通路を通らなければ入ることもできなくなっていた。
　中にはさまざまな設備が整っている。ベッドやキッチンまで完備した生活スペースに、いろいろな種類の魔法に耐えられるよう頑丈に作られた実験室。鉱石や世界中の秘宝を解析するための器具。うず高く積まれた、古いものから新しいものまで揃えられている本の山。
　それらすべてを管理するのは、ベロニカである。

しかし今、やや薄暗い研究室の隅には、壁に背を預けて座り込んだ彼女の姿があった。
膝を立てて、胸元の紅いペンダントを指先でもてあそぶ。
「どうして戻れないの……？」
つまりは、それだ。
邪神を倒して四年。ベロニカは旅を終えるなり、この研究室を作った。文献を収集し、読み漁り、情報をかき集めては世界中を飛び回ってきた。初めのうちは、カミュにも手伝ってもらっていた。住んでいる場所が近く、気心の知れている相手で、遠慮をする必要もなかったからだ。正直に言えば、下心もあった。もっと一緒に旅をしていたかった。その頃に、この研究室の存在もカミュにだけは教えている。
しかしすぐに、ベロニカは彼を誘うことをやめた。
「何か他に、試してない手は……何か……」
ぽつりとつぶやく声に返事はない。
当然だ。この部屋には彼女しかいない。誰にも、こんな姿は見せられない。
四年の間に、手がかりらしきものは何度となくつかんだ。古代の魔法、呪いの装飾品、神の民の里の壁画も調査し、魔女の口伝や地方の伝承まで洗い出した。
ベロニカの指先からペンダントがこぼれて、ぶらさがる。
気づかず、虚ろな目を床に向けたまま小さく何ごとかつぶやく。
何もなかった。不老を追い求めるような手記はうんざりするほど見つかるのに、不老を厭う書物はない。世界中を巡った勇者との旅ですら立ち寄らなかった小さな遺跡や、細かな伝承のひとつひとつを丹念に調べても、何も出てこない。
それならばとベロニカは自らの知識を経験を総動員して、新たな魔法を作り出そうとあがいた。成長を止める呪いを打ち破る魔法は、しかし一向に、完成の兆しを見せない。
そうしているうちに、日々、侵食されていく。
あたしはもう戻れないかもしれない。十歳にも満たない幼い体と、十六歳の体を一時的に行き来するだけ。その先も前もなく、永遠に時が止まったままなのかもしれない。

不安は毎日、少しずつ積もった。緩やかに堆積したそれは、ストレスになり、恐怖になり、痛みになる。今ではもう、一歩も前に進まない研究を前に、立ち向かう勇気すらもすり減ってきている。ただ絶望を目の当たりにするためには、戦えない。
　ノックの音が響いた。
　顔をあげて、ベロニカは扉を見やる。鍵はかけている。相手が誰でも、勝手に開けられて、こんな姿を見せるわけにはいかないからだ。
「……誰？」
「オレだ。カミュだよ。開けてくれ」
　鉄扉の向こうから、くぐもったカミュの声が届く。
　ベロニカは目を細め、逡巡したが、結局は立ち上がった。深呼吸を一回。後ろ向きで、痛ましい自分を飲み込むようにして、覆い隠していく。
　ペンダントに触れて、魔力を注入した。淡く赤色に輝くと、ほんの数秒でベロニカの姿はもとの十六歳の体を取り戻した。着ていた服までぴったりのサイズに変わっている。
　ぱしん、と自分の両頬を挟んで気合まで入れると、鉄扉の鍵を外す。
　開けると、紙袋を提げたカミュが気楽な様子で手をあげた。
「よう」
　四年が過ぎて、カミュは二十三歳になった。昔と大きく変わってはいないが、少し落ち着いたような気もする。旅の間よく着ていた緑色の装束は、最近では見かけない。
「何よ、どうしたの？」
「差し入れだよ。ほら、ダーハルーネのアップルパイ、好きだろ？」
　紙袋を持ち上げてみせる。確かに何度か行ったことのある、パイの美味しい店のものだった。
　ベロニカはちょっと笑って、腰に手を当てた。
「ありがと。アンタも暇ね」
「持って帰るぞ」
「冗談よ！」

ベロニカは紙袋を受け取って、中を覗き込む。まだ温かい。買ってすぐに飛んできてくれたのだろう。机に置きに行くと、カミュも中に入る。
「あ、ごめん。お茶切らしてるんだったわ」
「気にすんな。様子見に来ただけだからな。調子はどうなんだ？」
　机の上を乱雑に占拠していた本を強引にどかしながら、ベロニカは笑った。
「順調そのものよ。こうして元に戻ったまま作業するくらい、余裕ができてきてるわ」
「へえ。そりゃ何よりだ。でもほどほどにしとけよ。あんまり根詰めても逆効果だろ」
「別に根詰めたりしてないわよ。焦ってるわけでもないし」
　嘘だ。
　ベロニカはカミュにこの場所を教えたことをずっと後悔していた。
　本気で研究すれば、すぐに元に戻れると考えていたのだ。四年もかかって、手がかりのひとつもつかめないままだとは想像もしていなかった。
　いつの間にかすぐ後ろに近づいてきていたカミュが、気遣わしげな目を向けてくる。
「なあ、ベロニカ。無理はしてねえよな？」
「無理って何よ。学校もうまくいってるし、こっちの研究も順調よ」
　ベロニカは週に一度の魔法教室を、故郷であるラムダで開催していた。何しろ邪神までも滅ぼした、ロトゼタシア一の魔法使いだ。彼女の講義を聞くために、世界中から魔法使いの卵が集まってきている。そちらがうまくいっていることは、嘘ではなかった。
「そうか。なら、いいんだけどな」
　カミュはどことなく不安げだ。
　ベロニカは嘘がバレているのではないかと、胸がかすかに痛む。
「なあ、ベロニカ」
　囁く声が甘い。
　カミュの手がベロニカの髪に触れた。三つ編みに、その上に触

れ、首筋に指先が触れる。ベロニカは半ば振り向いて、首を振った。
「ちょっと、カミュ……」
「なんだよ」
「やめなさいよ」
「だめか？」
　声が優しい。どうしようもなく体温が上がるのを感じて、ベロニカは羞恥に首をすくめる。
「だっ……だめ……よ。ほら、離れて」
「あ——ああ。悪ぃ」
　心臓が痛かった。彼の声に、指に、触れられるだけで鼓動がどこまでも加速してしまう。
　それでも突き放して、カミュの肩を押した。
「ほらほら、もう帰りなさい。研究の邪魔よ」
「……そうだな。また来るよ」
「どうせならもっと豪華な差し入れにしてくれると嬉しいわ」
「おいおい。この間誕生日プレゼントやったばっかりだろ。わがままなやつだな」
　そう言いながらも、カミュの口元には笑みがあった。離れる寸前、彼は心残りのように、ベロニカの指先に少しだけ触れた。
「じゃ、俺は戻るか。なんかあったら遠慮なく言えよ」
「はいはい。ありがと」
　苦笑するカミュを部屋の外に押し出した。
　手を振って、笑顔で見送る。
　鉄扉を閉め、ベロニカは扉に額を押しつける。カミュの足音が遠ざかっていくかすかな音を聞くために、噛み締めるように耳を澄ませる。
　やがて静寂が訪れ、彼女は金属音を立てて錠を下ろした。
　淡い光が漏れ出る。ベロニカの体はほんの数秒で、小さな子供のものへと戻った。
「ごめんなさい」
　吐くようにつぶやく。
「ごめんなさい、カミュ……ごめんなさい……」

ぽつぽつと、床に小さな雫が散った。

◆　◇　◆　◇　◆

　キメラの翼で降り立ったカミュは、城を見上げた。
　かつて滅ぼされたユグノア王国の城は、今少しずつではあるが、かつての輝きを取り戻してきている。
　勇者イレブンとその祖父ロウが、正式にユグノア王室の一員として名乗り出て、復興を始めたためである。一度は魔道士ウルノーガの暗躍によって滅びの道を歩みかけたものの、魔物たちの襲撃から逃れた国民たちは、新たなる旗頭の元に続々と集まってきている。
　カミュは賑わう街並を間を縫って城へと向かった。
　人の数は多く、表情は明るい。まだまだ町としては最低限の体裁を整えた程度で、並んでいるのは掘っ建て小屋のような建物ばかりだ。それでも世界は平和で、未来は明るい。
　復興の象徴でもあるユグノア城の復旧は、最優先で進められている。外はともかく、中は随分とそれらしくなってきたようだ。真新しい城門を越えると、豪華ではないものの質実剛健とした城内が見えてくる。
　カミュはすぐにイレブンの姿を見つけた。
「よう」
　複数の町の男たちと話していたイレブンが振り向く。
「やあ、カミュ。ちょっと待ってね」
　男たちに何ごとか断ると、彼らはカミュに笑顔で会釈をして離れていった。
「よかったのか？」
「ちょっとした相談ごとだよ。あとでも平気さ。それより、元気そうで何よりだよ」
「そんなに久しぶりでもないだろ」
「そうだっけ。今日はどうしたの？」
　カミュは顔をしかめて、頭をがりがりとかいた。
「なんか深刻そうだね」
「まあな。アイツが限界だ」

「……ベロニカ？」
「ああ。相変わらず元に戻る方法を探してるんだが、全然見つからねえ」
「こっちも当たれるところは当たってるよ。でも、あれから歳を取ってないんだよね」
　イレブンは痛ましげに目を伏せた。
　かつて共に旅をした仲間を、勇者もまたずっと気にかけていたのだ。
「そうなんだよ。年齢を吸われただけなら、成長するかと思ったんだけどな。あのままじゃ、アイツはずっと子供のままだぜ」
「カミュはそれじゃ困るよね」
「からかうな。オレはどうでもいい。アイツが苦しそうなんだ。隠そうとしてるみたいだが、時々すげえ目をするんだ。途方に暮れて、さみしそうな……」
　イレブンは顎に手を当て、細い柳眉を寄せた。
「もちろん、ベロニカには元気でいてもらわないと困る。僕もいくつか方法は考えたんだけど、確実にこれだっていうのがなくてね」
「またお前にばかり頼るようで悪いんだが、マヤの時みたいに、勇者の奇跡で一発ってわけにはいかねえか」
「もう試したよ。ダメだった。そう単純な呪いってわけではないみたいだ」
「マジか……。お前でも難しいってなると、こいつは本格的に参ったな」
「ベロニカの様子はどうなの？」
「何事もないように振舞ってるよ。この間は誕生日会もしたらしい。お前呼ばれてねえだろ」
　ニヤリと笑ってやると、イレブンも同じ笑みを返してきた。
「カミュもでしょ」
「まあな。女連中だけでやったんだそうだ。ただ……セーニャは、順調に成長してるだろ。双子ってことは、十六まではお互い鏡みたいに、一緒に大人になってきたわけだ。それがひとりだけ置いていかれるってのは……キツイよな」
「そうだね……。復興の片手間になっちゃうけど、僕も何か手段が

ないか、また探してみるよ。何かあったらすぐ報せに行く」
　カミュは相棒に頭を下げた。
「頼む。なんとかしてやりたいんだ。アイツには、借りが多いからな」
「好きだからって言えばいいのに」
「うるせえ」
　イレブンを肘で小突く。それからふと、カミュは思い出したようにつぶやいた。
「そういや、願いを叶える力ってのがあったな……」
「願いを叶える？」
「いや、こっちの話さ」
　カミュは肩をすくめて、相棒の視線をごまかした。

　落ちる。
　大樹と共に大地に叩きつけられたベロニカは、そのまま意識を失う。その度に冷や汗をびっしょりとかいて、飛び起きる。
　簡素なベッドの上で、荒い息を吐きながら、額に浮いた汗を拭う。最近はこの夢を見るのも当たり前になってきた。死ぬ夢。みんなと離れ離れになる夢。ひとり、落ちて潰れる夢。
「……最悪……」
　吐き捨てて、ベロニカはベッドから降りる。
　図書館の地下の研究室だ。室温は低く、寝汗が冷えて体を震わせる。言うまでもなく、ベロニカの体は六歳前後の大きさを保ったままだ。
　乱雑な机の上から、手帳を取り上げる。日付を確認して、ふと、そのそばに置いたままの紙袋が目に留まった。中に入っていたアップルパイは美味しく頂いたので、袋の中身は空である。
「そういえば、二週間くらい来てないわね、カミュ」
　胸騒ぎがした。彼に何かあった、とは考えにくいが、いかな勇者の相棒とはいえ人間だ。それにもし彼に何かあったとしても、この研究室はベロニカとカミュしか知らない。連絡が来ようはずもな

い。
　不吉な夢か、冷えた寝汗か、あるいは悪寒に身を包まれて、ベロニカは身震いした。

　見慣れたクレイモランの入り口へ降り立つ。
　しんしんと積もる雪。吐く息は白い。ベロニカは慣れた手つきでペンダントに触れると、魔力を注ぐ。光に包まれ、現れたのは大人姿の彼女である。
　雪が音を吸収するせいか、クレイモランの街はいつ来ても静穏で、肌に刺さる冷気は意識を研ぎ澄ませる。ラムダからほど近く、カミュが住んでいるこの町は、ベロニカにとっても特別な意味があった。
　雪をかく住人に会釈しつつ、何度となく歩きた道を辿る。その先に見えて来たのは小ぢんまりとした一軒家だ。二階建てで、まだ新しい。カミュの働きに報いるために、クレイモランの女王シャールが用意した住居だった。
　息を吸う。
　見えてしまうから、この街でため息は厳禁だ。
　木の扉を叩いた。
「はいはーい」
　中から女性の声が返ってくる。少し待つと、扉が開いて馴染みの顔が出てきた。
「あ、ベロニカさんだ！」
「こんにちは、マヤちゃん。お兄さんは？」
　カミュの妹のマヤが明るい笑顔でかぶりを振った。
「さぁ。兄貴ならどっか出かけてるよ。詳しくは知らないけど、長くなるって言ってたな」
「そうなの……。マヤちゃん、学校はどうしたの？」
　マヤは二年前から、メダル女学園に通っている。学費はカミュが出した。バイキングの下働き時代が長すぎた妹に、一般常識を教えるのだと息巻いていた。ベロニカも学費の援助を申し出たのだが、

彼は自力でなんとかしたいと言い張り、結局なんとかしてしまっている。
「帰省中。ちょうど長期休暇なんだ。ごめんね、兄貴捕まえにくくて」
「ううん、いいわ。せっかくだからマヤちゃん、時間があったらお茶でもどう？」
「おれでいいの？　行く行く！　ちょっと待ってて！」
　マヤはばたばたと慌ただしく室内へ戻っていく。ベロニカはその隙に、ペンダントに触れて魔力を回収した。あっという間に子供姿に戻り、一息つく。万が一カミュが突然帰ってきた時のために、魔力は温存しておきたかった。
　一分と待たされることもなく、再び扉が開いた。
「ベロニカさん、お待たせ！　……あれ、そっちの姿に戻るんだ」
　一瞬マヤの視線がさまよい、低くなったベロニカの目線を探す。
「大人姿は疲れるのよ。あんまり長く保っていられないの。……カミュには内緒ね」
「おれはどっちも好きだけど、その姿だと苦労しない？　酒だって飲めないだろ」
「そうなのよね。酒場に入っても子供の来る場所じゃない、って追い返されちゃうわ。マヤちゃんは、今年成人だったわね。おめでとう」
「ありがと。そうなんだよ。やっとおれも堂々と酒が飲めるんだ」
　よほど憧れでもあるのか、マヤは嬉しそうだった。
　連れ立って、勝手知ったる街を歩く。
　暖房のよく効いた暖かなカフェに入ると、ふたりともホットのミルクティーを注文した。
「お酒飲むんじゃないの？」
「ひとりじゃつまんないからさ」
　ニカっと笑う。
　ベロニカは彼女の屈託のない笑顔が好きだった。
「ベロニカさんはさ……」
　届いたマグカップで両手を温めながら、マヤがぽつりとつぶやいた。

「何？」
「兄貴のこと好きなんだろ？」
　直球な質問に、ベロニカは思わず苦笑する。
　兄のほうもこれくらい素直なら、扱いやすいのだけど。
「カミュには内緒ね」
「わかってるって！　いやぁ、兄貴みたいなのでもこんな可愛い人に好かれたりするんだな！　でもさ、出会って四年だろ？　まだ付き合わないの？」
「あたしはともかく、アイツの気持ちは知らないもの」
「いや、兄貴はベロニカさんのこと好きだよ。絶対。間違いない。家で話す話題の半分以上がベロニカさんのことだから。――あ、兄貴には内緒な」
　ふたりで顔を見合わせて、くすくすと笑った。
「……そうね。あたしがちゃんとしたら、ちゃんと伝えたいな」
「ちゃんとって？」
「この体よ。子供のままじゃアイツが可哀想でしょ」
「ああ、変態扱いされちゃうか。スケベなこともできないしな」
「そうそう」
「その、年齢が下がった呪い、まだ解けないんだ？」
　ふと、反射的に嘘をつきそうになる。
　けれどマヤは違う。すごくいい子だけれど、あの旅の仲間たちではない。
「そうね。簡単なものじゃないみたい」
　そっかぁ、と頷いて、マヤはテーブルを指でとんとんと叩いた。
　そうして、どこか言いづらそうに口を開く。
「おれもさ……呪われたことがあるんだよ。って知ってるか。なんでも黄金にしちゃう呪いの首輪に引っかかっちゃってさ。よりによって兄貴からのプレゼントだったんだけど。勇者サマが助けてくれなきゃ、まだおれは黄金のままだったかもしれないし、そしたら兄貴にはおれのこと、今でも背負わせたままだったと思うんだ」
「勇者イレブンさまさまね」
「うん。ほんとに。でもさ、五年間、おれの時間はとまってたから、兄貴とは歳の差も開いちゃったんだ。本当は二歳差だったの

に、今は七つ違う。五年で済んだのはラッキーだけどね。下手したら、おれが治ったら目の前にはじーさんになった兄貴がいたかもしれないんだし。だからその……おんなじじゃないけど、ちょっとはわかるよ、ベロニカさんのこと」
　ベロニカは何も言わずに、マグカップを抱えて、じっとマヤを見据えた。
　空色の瞳。見慣れたものと同じ色が、優しく見つめてくる。
「しかもベロニカさんは、今でも歳をとらないんだろ？　いや、普通の女の人からしたら羨ましい話かもしれないよ。歳をとらなくなるなんて。本当に歳を取らなくなったことなんてないからそう言えるのさ。だって——置いていかれるのって、怖いよな」
　声は出せなかった。もう絶望も失望もしていたつもりなのに、声を出してしまえば一緒に嗚咽まで出てしまいそうで。
　ベロニカはただ目を伏せて、ミルクティーの湯気の中に頷いた。

「ベロニカ」
　声をかけられて、彼女は来客用のソファーからぴょんと飛び降りた。
「久しぶり、イレブン。どう？　復興のほうは」
　再建の途上にあるユグノア城で、城主であるイレブンは楽しそうな笑顔を見せた。
「毎日忙しいよ。けどみんな頑張ってる。一番はロウ爺ちゃんだけどね」
「そりゃあ悲願だもの、おじいちゃんも張り切るわ。ねえ、アンタ、王さまになるの？」
　腕を組んで、イレブンは困ったように眉を寄せる。
　もともとが綺麗な顔立ちなので、そんな姿もさまになる。
「僕は別に王さまには興味ないんだ。けど、王さまになることを期待されてるみたいだね。どうなることやら」
「ふぅん……。邪神も倒したっていうのに、アンタもいろいろ大変ね」

「国ひとつ背負うのって大ごとだとは思うけど、あの頃の旅と違って世界丸ごとは背負ってないから、ずいぶんと気楽だよ」
　本当に気楽そうに言うので、本当に国王になるということがわかっているのか、ベロニカは少し心配になった。とはいえ、彼女がずっとそばにいて補佐するわけにもいかない。本題を切り出すことにした。
「それは間違いないわね。――ねえ、イレブン。ところで最近、カミュに会わなかった？」
「カミュ？　一週間くらい前にここに来たよ。少し話して、ご飯食べて一泊してった。それからは見てないな」
「アイツ、どこ行ったのかしら。マヤちゃんに聞いても行き先は告げてなかったみたいで、捕まらないのよね」
「行き先は僕も知らない。けど、カミュもベロニカのことを話してたよ」
　ベロニカは眉をひそめた。
「あたしの話？　何よ。愚痴じゃないでしょうね」
「心配してたよ。早くベロニカの悩みが解消されればいいのに、ってさ。ふたりとも素直じゃないから、大変だね」
「それに関してはもう諦めてるわ。アイツ、無茶してなければいいんだけど」
　イレブンはうーんとうなりながら、首を傾ける。
「そういえば……願いを叶える力、って話してたな」
「願いを叶える力？　何よそれ。ちょっとうさんくさい」
「いや、僕もどこかで聞いたことが――」
　ふたりで虚空を見上げる。再建しかけのユグノア城だが、仕事は非常に丁寧で、廊下の天井には精緻な模様まで刻まれている。それをぼんやり見つめ、ふと、腑に落ちた。
「あ」
　見ると、イレブンも同じ結論に達したようだった。
「そうか。ネルセンの試練だ」

かつて、四年ほど前の一時期、勇者一行はネルセンの試練と呼ばれる修行に明け暮れたことがある。邪神を滅ぼす力を蓄えるため、先代の勇者ローシュの仲間であった戦士ネルセンが残した、修行のための試練に立ち向かったのだ。
　今は神の民が管理する迷宮の入り口に、ベロニカはルーラで降り立った。ふわりとつま先が着地するのももどかしく、駆け出す。長い階段を小さい体で登るのは時間がかかる。飛ぶように駆け上がりながら、ペンダントへと魔力を収束させた。淡い光が走る。
　試練は強力な魔物たちの徘徊する迷宮と、ネルセン自身が用意した恐ろしく強い化け物との戦いで構成されていた。その両方を突破することで、ネルセンは願いごとを叶えてくれる。一見するとくだらないような願いごともあったが、それらはすべて世界の法則をねじまげるほどの強い効果を発揮していた。
　盲点、というわけではない。ベロニカも当然考えた可能性だ。しかし当時ですらみんなで苦労した試練を、ひとりでどうにかできる気はしなかったのだ。
　階段を登りきり、扉にぶつかりそうな勢いで走っていく。
　押し開けようと両腕を伸ばし――扉が先に開いた。
「おっと！」
「きゃっ」
　飛び込んだベロニカは、そのままカミュに受けとめられた。
　勢いを受け流すために、カミュはベロニカを抱き締めたまま踵でくるりと回る。
「カミュ！」
「なんだ、見つかっちまったのか」
「バカ！　何無茶なことしてるのよ！」
「ベロニカに言われたくねえな。無茶してるのはお前のほうだろ？」
「あたしは――あたし自身のことだもの。カミュには――」
「関係ないか？」
　息を呑んで、ベロニカはあまりにも近すぎるカミュの目を見つめた。
　彼が優しい人であることは、とっくに知っている。苦しむベロニ

カを放っておいてよしとできないこともわかっていた。
　だから隠したかった。
　一歩も先に進めない失望を、彼と共有したくはなかった。
「……って、アンタ、ぼろぼろじゃない！　何してんのよ！」
　ベロニカは慌ててカミュの体を押し返した。
　ベロニカの服に血がべったりとつくほど、カミュは満身創痍だったのだ。
「見ての通り試練だ。中に入るのに苦労したんだぜ。神の民に協力してもらってやっと——」
「そうじゃなくて！　そんな血だらけになって……。どうしてひとりで潜ったりしたの」
　カミュは青い髪をかきあげ、困ったように目をそらす。
「どうしてってそりゃ……用事があったんだよ」
「ネルセンに？　なんの用事？」
「なんだっていいだろ。スケベ本だよスケベ本」
「絶、対、嘘！」
「なんだと？　オレだってスケベ本のひとつやふたつ——」
「アンタがえっちなのは知ってるわよバカ！」
「……マジか」
「そうじゃなくて、そんな用事でここに来たわけじゃないんでしょ？　どうせ、カミュは、優しいんだから……」
「……ただの思いつきだ。無駄足だったしな。結局、ネルセンの力でお前の呪いを破る手段はねえってよ」
　ベロニカは俯いて、カミュの目を視界から外した。
　見ていられなかった。どうせ、何をしても無理なのはわかっていた。
「なんでアンタは……あたしのためにそこまでするのよ」
「なんでって、そりゃ、決まってるだろ」
「元に戻って欲しいから？」
「そんなの、お前が戻りたくないなら、オレはそれでもいい」
「あたしは大丈夫だって、言ってるじゃない……ちゃんと戻れるし……順調なんだって……」
「大丈夫に見えねえんだよ。オレは、お前が苦しんでるのは嫌なん

だ」
「だって……あたしだって……」
「手伝わせろよ。みんなお前のことを気にかけてるんだ。シルビアのおっさんは世界中巡りながら情報を集めてるし、マルティナとグレイグはデルカダール王室の権力使ってまで調査してる。イレブンは自分の力でしかできないことがあるんじゃねえかって、ロウの爺さんといろんな実験を試してる。セーニャが何度、お前の姿が見えないって泣きついてきたか知ってるか？　アイツは誰よりお前のことを心配してる。なんで苦手な新しい魔法まで覚えたと思ってるんだ。たまたまで克服したってのを信じてるんじゃねえだろうな。ベロニカの呪いを解くために、あいつも必死なんだ」
「……そんなの……」
　薄々、気づいてはいた。苦しんでいる自分をどれだけ上手に隠しても、きっとみんな気づいてしまうだろうとも思っていた。
　だってみんな、底抜けにお人好しだから。
　だから言いたくなかったのに。
「ベロニカ。オレだって、お前には笑ってて欲しいんだよ」
「だって――」
「あ、悪ぃ。限界だわ」
「へ？」
　ベロニカは俯いていた顔をあげる。
　ふらりと傾いたカミュが、そのまま倒れてきた。
「カミュ！　ちょっと！」
　それを大慌てで受け止める。意識のないカミュの体は想像より重く、しゃがみこんだ。目を固く閉じた彼の顔には、疲労の色が濃い。出血はもうとまっているように見えるが、ベロニカは治療の専門家ではない。
　ならば専門家に見せるしかない。
「ルーラ！」
　唱えたベロニカとカミュの姿は光に包まれ、空へと飛翔した。

隣室から出てきたセーニャが、ベロニカの視線に気づいて微笑んだ。
「ひとまず落ち着きました。怪我は命に関わるほど深くはないですが、疲労が溜まってるようなので、しばらく寝かせてあげましょう」
セーニャは口元に人差し指を当てる。静かにしてあげよう、ということだ。
ベロニカは悄然と頷いた。
「うん。ありがとう、セーニャ。あたしに、癒しの魔法が使えれば……」
うなだれるベロニカは、すでに子供姿に戻っている。ラムダまでルーラで飛んで、セーニャを呼びにいく頃にはすでに魔力が切れて、大人姿を維持できなくなっていた。
非力な子供姿では、カミュを抱えて歩くことすらままならない。セーニャは里の人にも手伝ってもらい、カミュを双子の家へと移した。
ベロニカは何もできず、ただ見守っていた。
彼女のために戦い、傷ついてくれた人を、じっと見ていることしかできなかった。
「お姉さま」
テーブルの対面に腰を下ろしたセーニャに呼ばれて、ベロニカはぼんやりと目を上げる。
「そろそろ本当のことを、話してはもらえませんか？」
「……本当のこと？」
「はい。お姉さまが隠していることです」
セーニャの表情は真剣そのもので、決して簡単に言い逃れできるようなものではなかった。
妹のそんなに真に迫った顔を見るのは、実に四年ぶりだ。
「体にかかった呪い、解けないんですよね」
「……解けなくても、平気よ」
「いいえ。平気な顔をしていません。私は、もし歳をとらなくなったのだとしても、お姉さまがよければそれで構いません。少しさみしいとは思いますが、無理に元に戻る必要はないでしょう。です

が、お姉さまは、よくないと思っています。ちゃんと元通りになりたいと考えています。その上で、呪いが解けない。解きたいのに、解けないでいます。違いますか？」

　ベロニカは切々と訴えるセーニャの言葉を、噛み砕いて、飲み込んで、息を吐いた。

「……あたしね、四年間ずーっと、この呪いのことを研究してたの。……最初は年齢が戻ってラッキーと思ったし、まぁ一応研究しておいて、飽きたら戻ろうかなって考えてた。……でも一年経って、あたしは自分の体が全然成長してないことに気づいたわ。放っておいてもまた成長はするものだと思ってたから、気づいた時は本当に、血の気が引いた。……このままじゃみんなと年齢が離れていく一方なんじゃないかって」

　できる限り淡々と、ベロニカは語った。もう何も言わずに過ごすことはできない。セーニャもカミュも、彼女が考えているよりもずっと、彼女のことを考えていてくれたのだから。

「それからは必死に解呪の方法を探してた。ウラノスさまにいただいたペンダントに魔力を込めると、一時的に戻れるのは間違いないのよ。だからなんとかなると思ってた。……でも、あれは呪いの表面上を一時的に取り繕っているだけのことで、根本的な解決にはならなかったわ。……いろんな文献を読んだ。世界中飛び回って、いろんな秘宝も探した。でも、全然、なんにも、効かないのよ」

「イレブンさまの力では……」

「とっくに頼んだわ。でもダメ。何か、おかしな、複雑な力の影響があるみたい。もともとは魔力を吸い出されないために、あたし自身が踏ん張ったら、代わりに年齢が吸われただけのはずだったのよ。だからたぶん、この呪いはあたし自身が無意識にかけたものなの。それなのに、どうしても解けない……」

「お姉さま……」

　セーニャの瞳が揺れていた。ベロニカ自身によく似ているのに、ことさらに慈愛の情が強いすみれ色の目が、濡れている。

「ごめんね、セーニャ。あたし、セーニャの頼れる姉でいたいの。弱いあたしを見せたくない。でも――怖いのよ。すごく怖い。セーニャは苦手な攻撃魔法まで覚え始めたじゃない？　それなのに、あ

たしはまったく成長しない。回復魔法だって覚えないし、身長だって一ミリも伸びない。あたしだけ時間が止まってるみたい。このままじゃ、あたしはみんなに置いていかれる」
　置いていかれるのって、怖いよな。
　そう漏らしたマヤの声が脳裏で繰り返される。
「そんなこと、しません。私は絶対に、お姉さまを置き去りになんて――」
「オレたちが、お前を置いていくわけねえだろ」
　いつから聞いていたのか、扉が開いた。
　その扉になかば寄りかかるようにしながら、カミュが入ってくる。
「カミュさま、まだご無理はなさらずに……」
「いいんだ、セーニャ」
　カミュはまっすぐに、ベロニカを見ていた。
　空色の瞳からは、まるで睨みつけるような怒気を感じる。ベロニカは睨み返した。
「あたしだけ歳を取らないのよ。ねえ、このまま何年も、何十年も経ったらどうなるの？　みんなおじさんになって、おばさんになって、おじいちゃんになって、おばあちゃんになって、セーニャもカミュも、みんな、あたしを置いていなくなっちゃう。その時もきっと、あたしはこの姿のままなのよ。ひとりだけ、残されて……」
「そんな、そんなこと、させません！」
「だって治せないの！　あたしより魔法に詳しい人がいる？　あたしより呪いのこと調べた人がいるの⁉　どこにも方法がないのよ、なんにも……！」
「それでも絶対に……もう……二度と……」
　セーニャの両目から、ぼろぼろと大粒の涙がこぼれだす。かけがえのない妹の涙に、ベロニカは胸がひどく苦しくなるのを感じた。それでも、言葉がとまらない。あふれてきた弱音が、喉にからまってとれない。
「夢を見るのよ。最近ね。同じ夢ばっかり。みんなが宙に浮いてるの。あたしはひとりでそれを見上げてる。そのまま、みんなはどこか遠くに、手の届かないところに、飛んで――あたしは――ひと

り……悲しくて苦しくて、もう嫌なのよ！　置いていかれるのは、いや……ひとりになるのは……いや……！」
　歯を食いしばったベロニカの目からも、どうしようもなく雫がこぼれる。
　机に手をついて、支えながら近づいてきたカミュが、彼女の頭に手を置いた。
「ベロニカ、オレにもわかる。置いていかれるのは、つらいよな。大切な奴がいなくなるのは、悲しいよな」
「何がわかるのよ！」
　ベロニカはカミュの手を打ち払った。
「カミュは大人になっていくじゃない！　マヤちゃんだって置いて、アンタだけ先に進んだじゃない……！」
「そうだな。でもマヤは前に進んでる。お前だって進める」
「無責任なこと言わないでよ……！　もうなんの手もないの！　勇者の奇跡も魔女の魔法もネルセンの願い事も神の民の知恵も、古代図書館の本だって全部読んだわ！　何もないの。こんな呪いは誰も知らなかったのよ！」
「それでも――」
「みんなと一緒にいても、どんどんズレてく。年齢だけじゃない。できることも、考え方も、生き方も。あたしだけ取り残される！　怖いの。苦しいの。耐えられないの……」
「ベロニカ」
「触らないで！　カミュ……あたし、カミュのこと好きよ。大好き。セーニャと同じくらい大切に思ってる」
「オレもだよ。ベロニカ、オレもお前が好きだ。だから諦めないでくれ。きっと方法が――」
　ベロニカはそっと、カミュのくちびるに指を当てた。首を振る。
「好きだから、もう限界。一生このままのあたしを愛せる？　あたしがいなければって、あたしが思うのに？　間違っても、あたしのためにアンタたちを縛りつけたくない。大好きだから、もう一緒にはいられない」
「お姉さま！」
「ごめんなさい……」

ベロニカは椅子を飛びおりると、玄関に向かって駆け出した。
　しかしその前に、カミュが腕をつかむ。
「ふざけんなよ！」
　軽い体は、カミュの力に対抗し得ない。
　引き寄せられて、ベロニカはカミュを突き放そうともがいた。
「離して、触らないでよ！」
「うるせえ！　もう二度とお前を失ったりしないって決めたんだ！　絶対離さねえからな！」
　力ずくで抱き締めてくるカミュに、ベロニカは怪訝な顔を向けた。
「何よ、もう二度とって……」
「お姉さま。実は——」
　セーニャが声をあげた、その時だった。
　こんこん、とノックの音が響いた。
　三人の目が玄関へ向かう。そろりと扉を開けて顔を見せたのは、勇者だった。
「お取り込み中？」
「イレブン、てめえ、タイミング計ってんじゃねえだろうな」
「人聞きが悪いね、カミュ。お邪魔しますよ」
　入ったイレブンの姿を見て、目を真っ赤にしたセーニャが首を傾げた。
「イレブンさま……その剣は？」
「うん。奉納してないほうの、僕たちが作った勇者の剣だよ」
　腰に下げていた片手剣を軽く持ち上げる。
　確かに、邪神を倒す前に火山の鍛冶場で打った剣に違いない。
「どうしてその剣を？」
「道々話そう。それより、ベロニカ」
「な……何よ」
　カミュの腕の中でもがいていたベロニカに、イレブンはしゃがんで目線を合わせた。
「僕もセーニャも、他のみんなだって、カミュと一緒だよ。君を二度も失う気はないんだ」
「だから、二度って、なんなのよ！」

「イレブン、話すのか？」
　ベロニカを抱き締める、というよりは締め上げるような格好のままカミュが訊く。
「うん。やっと、ベロニカも追いついてきたんだ」
　ベロニカはやり取りの意味がわからずに、腫れた目で三人の顔を順繰りに見るばかりだった。

◆　◇　◆　◇　◆

　イレブンのルーラが到着したのは、人のよりつかない辺境の地だった。目を開けて見回してみても、視界に入るのは山々と空、それに古びた立派な塔がひとつきりである。
「ここって、セニカさまの……？」
「うん。あの人はもういないけどね。あの塔の役割覚えてる？」
　イレブンは気負った様子もなく、かつて一度だけ訪れた塔を指差した。その様子はまるで時が止まっているかのように、四年前とまるで変わっていない。
　カミュとセーニャはなぜか、ひどく優しげにベロニカを見ている。ふたりがイレブンの問いかけに答える様子がないのを見て取って、ベロニカは軽く咳払いした。
「……あたしが答えるの？　確か、世界の時間を蓄積してるのよね。どういうことなのかは、わからないけど」
　頷いて、イレブンは何気なく続ける。
「僕はここで時を渡ったことがある」
「時を渡った――って？」
「世界の時を巻き戻して、僕は過去に戻ったんだ。たくさんの悲しいことを、少しでも減らすためにね」
「……あの旅の中で？」
「そう。世界はひとつの道の上にあって、僕は道の先から特別に引き返してきた。この塔と、勇者の力を使って。その先にある障害を取り除くためにね。そこまでした理由はいろいろとあるんだけど、一番大きいのは、ベロニカなんだ」
「あたし？」

聞き返しながらも、ベロニカはどうしてか、その話をどこかで聞いたことがあるような気がしていた。まるで子供の頃に読んだ絵本のように、ぼんやりと、思い出せる。
「僕のいた未来では、命の大樹が墜落したんだ。魔王ウルノーガが猛威を奮って、デルカダールなんて滅びかけたし、世界中にたくさんの被害が出た」
「そうなの……。世界は滅びかけたのね」
突拍子もない物語が、なぜか腑に落ちる。
彼の語っていることが真実なのだと、理屈ではなく信じられた。
「ベロニカ、君の見る夢は、いつも命の大樹でのできごとじゃない？」
「どうして知ってるの？」
「それは本当にあったことなんだ。ベロニカは命をかけてみんなを守ってくれた。そうして助けられた僕たちは、世界を救った。でも君の死に納得できなかった僕たちは、時を巻き戻すことを決めたんだ」
「あたしのために？」
「っていうと大袈裟かな。あの戦いで失われたものは多すぎたから、決してベロニカのためだけってわけじゃない」
「うん」
「時の巻き戻しは、あくまでも一定の時刻まで世界を引き返させるものだった。世界はひとつで、みんなはひとりだけ。そのうちに、消えた未来の記憶が、みんな少しずつ戻ってきてね」
「……ってことは、カミュも、セーニャも？」
カミュは気まずそうに頭をかいて、苦笑いした。
「まあな。黙ってたのは、悪かったよ」
「お姉さまには簡単に言えることではなかったんです。何しろ、お姉さまは……」
わずかに俯いたセーニャの瞳が、またしても潤む。
ベロニカは慌てて妹の手に触れた。
「ちょっと、セーニャ、泣かないでよ。だってあたし、なんにも知らないのよ」
「もう時間の問題だよ。シルビアもマルティナもロウじいちゃんも

グレイグも、みんなもう記憶を取り戻してる。他の人はそうはいかないみたいだから、僕の影響かもしれないね」
「まったく、マヤが余計なことを思い出さなくてよかったぜ」
　カミュが軽く肩をすくめる。セーニャが泣き笑いをした。
　ベロニカは勇者を見上げ、首を傾げた。
「……でも、だから？　あたしの体がどうにもならないことは変わらないでしょ……？」
「それなんだけど」
　彼は腰に提げた剣を抜くと、その柄をベロニカに握らせてきた。片手で楽に扱っているように見えたのに、ひどく重い。慌てて両手に持ち直した。すると今度は、イレブンがベロニカの手を両手で包み込む。
「……何をしてるの？」
「待ってね。……はいどうぞ」
　手を離すと、ベロニカの手の甲に、見慣れた勇者の紋章が浮かび上がっていた。
「これって、セニカさまにしていた……」
「力の渡し方がこれしかわからないから、剣まで持って来ちゃった。一時的なものだけどね。こんな方法を思いついたのも、ベロニカの記憶が戻ってきている確信が得られたからだよ。ほら、ベロニカ、あっちを見てみて」
　イレブンが指差したのは塔そのものではなく、そのすぐそばにある、なんの変哲もない崖のような場所だった。
「……何もないぜ」
「ないですね」
　カミュとセーニャが口々に言う。
　ベロニカは何か違和感を覚えて、目を凝らした。
　徐々に、何かが見えてくる。
　地面に、崖に、木々の枝の上に、何かがいる。
　目をぱちくりと瞬かせて、少し細める。
　それは何か、うっすらと青い、半透明の小さな生き物だった。目と鼻らしきものだけがついているが、機能しているのかははなはだ怪しい。手が細く長く、指はついていない。

「な、何あれ!?　変な生き物がいっぱいいるわよ！　ふたりとも見えないの!?」
「はぁ？」
　カミュが思い切り眉をひそめた。本気で見えていないようだ。
　苦笑気味のイレブンが言う。
「実はあれ世界中にいるんだけど、僕にしか見えないみたい。やっぱり力を渡せば見れたね」
「なんなの、あれ？」
「失われた時の化身、って言うらしい。何かって聞かれても困るんだけど、あの子たちが世界の時を紡いでるんだってさ」
「……つまり？」
「時間を司ってる」
　おい、とカミュが口を挟んだ。
「それはつまり、ベロニカの時間を進められるってことか？」
「そんな……」
　セーニャが自らの口を覆う。開いたままの涙腺から、ぽろりと雫がこぼれだして、ベロニカは剣を片手で支えてでも妹の指に触れざるを得なかった。
「たぶん、だけどね。ベロニカは自分で自分を呪ったって思ってるみたいだけど、そんなに強力な呪いを――いくら天才魔法使いとはいえ――ひとりでかけられるとは思えなくて。ものすごーく申し訳ないんだけど……僕が世界を巻き戻して起きちゃった不具合なんじゃないかなーって……」
「そんなこと起きるのかよ！」
「わからないよ。世界を巻き戻したのは僕ひとりだけらしいし、何が起こるかなんて誰も知らないでしょ。でも、だとすればそれを直せるのは、世界の時に関わる何かじゃないかって思って。彼らが時を蓄えているなら、もしかしたら……」
　三人の視線を受けて、ベロニカは戸惑った。
　世界の時を巻き戻した不具合？
　そんなことあるのかと訊きたかったが、訊く相手もいない。何しろこの世界が始まってたった一度の事象だ。どんな文献にも伝説にも残っていないのは、当たり前なのだ。

勇者の剣をその場に置く。見上げると、見守るような仲間たちの注目が集まっている。
　どうせダメだ。もうどうにもならない。あたしは死ぬまでひとりきりになるしかない。
　そんな風に諦めていたのに。
　あたしは諦めていたのに。
　誰もあたしを諦めてくれない。
　胸がいっぱいになった。
　こんなに想われて、愛されていることは、知っていたはずなのに、どうして身勝手に消えようなんて考えてしまったのだろう。
　手の紋章を見つめる。
　ベロニカはゆっくりと歩き出した。
　もしこれで戻れなくても、きっと大丈夫。
　諦めるのはまだまだ早い。あたしには頼れる仲間がいる。
　失われた時の化身と呼ばれた生き物は、崖下にものすごい数が集まっていた。ざっと数えても、二十くらいいる。ちょっと近寄るのが怖い。振り向くと、イレブンが頷く。セーニャは涙目で、口元を隠している。頬が赤い。カミュは——。
　カミュはひどく大切なものを見るように、ベロニカを見守っていた。
　あたしは、ひどい裏切りをするところだった。
　心臓が早くなる。どうしても期待してしまう。
　一歩一歩近づくと、不思議な生き物もベロニカを認めて近寄ってくる。棒のような、ふにゃふにゃとした腕を伸ばして、ベロニカの手の甲を探る。それから腕を、足を、首を。
　ぺたんと座り込んだベロニカを覆うように、いくつもの化身が集まってきた。膝、肩、頭の上にまで乗ってくるのに、重さをまるで感じない。
　ふんわりと優しい何かに包まれているような気がした。
　それは何かの想いだったのかもしれない。世界の時を紡ぐという、失われた時の化身は、その紡いできた時そのものなのかもしれない。本当のところはわからないけれど、ベロニカにはそれが誰かの過ごしてきた優しい時間のような気がしてならなかった。

目をつむると、目尻からは自然と涙があふれていく。
まぶたの向こうがまぶしい。
淡い光に包まれて、それを邪魔しないようにそっと息をつく。
ぱきん——と音がして、ベロニカは目を開けた。
首元から鎖が滑る。ウラノスにもらった紅色のペンダントが、地面に落ちた。
まるでもう、役割を終えたと言うかのように。
「お姉さま……！」
涙に濡れたセーニャの声が聞こえる。
気づくと、化身たちはもうベロニカの目には映らなくなっていた。手の紋章を見下ろすと、消えている。
それどころか、手の大きさが違う。指は細く長くなっていて、幼い子供のものではない。地面がさっきより少しだけ遠い。目線が上がっている。
走る音に振り向くと、ちょうどセーニャが飛び込んできた。
ベロニカは妹を受け止めて、背中にきつく腕を回す。
「お姉さま……良かった……！」
「セーニャ……。あ……あたし……ごえ……ごめん……なさい……！」
「お姉さま、もう、もう、大丈夫です。もうずっと、一緒にいられますから！」
ふたりは声をあげてわんわんと泣いた。体の中にこんなに水分があったのかと思うほど、涙も鼻水もとめどなくあふれてくる。
最後にこんなに号泣したのはいつだったか、ベロニカはどこか落ち着いていく頭の片隅で記憶をめくる。きっと幼い頃だ。大人ぶってセーニャと一緒に旅立ってからは、こんなに泣いたことなんて一度もなかった。
終わった？　あたしはもう、呪いから解放された？
実感が伴わない。達成感よりも、拍子抜けしたような気分。でもとにかく、胸の中にずっとあったもやもやとした黒いものが消えていくようで、すっきりする。
ひとしきり泣き終えると、セーニャはベロニカの頭を撫でて、立ち上がった。

振り向いて、待っていた男性陣を見る。
「ほらカミュ。行ってあげなよ」
　イレブンがニヤニヤと笑いながら相棒を小突いた。
　青髪の元盗賊は、きまり悪げに赤くなった目元をこする。
「いや、オレは結局何もできてねえし……」
「そんなことないさ。何が正解かわからなかったんだ。たまたま僕の思いつきが当たっただけ。みんなでベロニカを思いやった結果だよ」
「ったく。ものは言いようだな」
　カミュは皮肉げな笑みを浮かべながら、粗雑なふりをして足音高くベロニカに近づく。
「おい、おチビちゃん」
　ぐずる鼻をすすりあげながら、ベロニカは滲んだ目で好きな人を見上げた。
「だ、だえが——誰が、チビちゃんよ。もう、ちっちゃくないんだから……！」
　カミュは膝を曲げて、座ったままのベロニカに目線の高さを合わせる。
　親指で、彼女の目元の涙を拭った。
「そんなに泣くな。せっかくの可愛い顔が台無しだぜ」
「かっ……かわい……？」
「嘘だよ」
「何よ！」
　はは、とカミュは笑った。
「台無しじゃねえよ。泣いても可愛い」
「はっ……あっ……えっ!?」
「さっきのやつ、もう一回言ってみろよ」
「さ、さっきのやつ？」
「ラムダで言ってたやつさ。オレのことなんだって？」
「言えるわけないじゃない！」
「オレは言えるぜ」
「いっ……言ってみなさいよ……」
　途端、頭の後ろに手を添えて、優しく、抱き寄せられた。

泣きすぎて痛む頭では、抵抗できない。
　カミュが囁いた。
「もうお前を失わない。絶対に離さない」
「……ほかには？」
「好きだ、ベロニカ。大好きだ」
「……さっきは、ごめんなさい……」
「おう」
「……大好き」
「おう」
　ごほごほ、とかなりわざとらしい咳払いが聞こえた。
　ベロニカは慌ててカミュを突き放す。顔が真っ赤に染まっていた。
「おふたりとも、盛り上がってるところ悪いけど、みんなにも報せにいかないとね」
「あ、ああ。そうだよな、相棒」
「そうね。みんなに心配かけちゃったし。……セーニャ？」
　セーニャはなぜか不機嫌そうな目でカミュを見ていた。
　視線を向けられると、不満げにくちびるをとがらせる。
「私はまだ、お姉さまとカミュさまの仲を認めたわけじゃありませんからね。お姉さまはまだ私のそばにいるんです」
「も、もちろんよ。こんな奴のためにセーニャのそばを離れるわけないじゃない」
　にこりと妹の笑顔が咲く。
「よかった。さすがお姉さまです」
「おいおい、マジか……」
「ほら行くよ。まずはシルビアのところかな」
　楽しそうに笑って、イレブンがルーラの準備に入った。
　ベロニカはカミュとセーニャに手を引かれて立ち上がる。
　身長はカミュより少し小さくて、セーニャとはぴたりと一緒だ。
　思わず笑顔になってしまう。
　ただ並んで歩けるだけで、ただ一緒に歳を取れるだけで、こんなにも幸せな気持ちになれる。
　ベロニカは先をゆく三人に、声を振り絞った。

「あの、たぶんもう、あんまり言わないから、よく聞いてね」
　振り向いた三人に、ベロニカはまず深呼吸。
　それがため息になることは、きっともう多くない。
　最大級の笑顔を見せて、ベロニカは大きな声を張り上げた。
「本当に、ありがとう。あたし、みんなが大好き！」